

悪夢

roukasyoujo

目が妙に大きなこどもに服をつかまれた。そのままひっぱって、どこかへつれていこうとする。煙が上がっている家の残骸を横目にこどもについていくと、死体があった。まだあたたかいと想定されたあたらしそうな死体は母親のようで、赤ん坊を抱いていた。大事そうに、何かから守るように抱えている姿は眠っているように見えた。こどもは死体を見つめている。

おかあさん、と幼い声でこどもは言った。

おかあさん、おかあさん、おかあさん。

瓦礫が散らばっている地面にへたりこんで俯いた。それでも耳は塞げなかった。こどもの声を聞いていた。

こどもは傍らに転がっている赤茶色の煉瓦を両手で持つと、自分の足に落とした。煉瓦がたたきつけられる音と骨が割れる音が響いた。

もういちど煉瓦を拾い上げる。おとす。音が響く。おとす。音が響く。

おかあさん、おかさん、おかあさん、あああああああ。

「あああああああ」

こどもは声を出して涙を流さずに泣いた。

死んだともだちも、おかあさん、と言った。そう言って、息絶えた。目を閉じたともだちの死体は、口からもひたいからも血を流していた。

こどもは泣きやむと、おれを見つめた。黒い瞳はうつろで、おれを見ているというよりは、そのずっと向こう側を見ているようだった。

小さな口がゆっくりと動く。

「あなたがころしたの」